# 図書館だより

第 28 号
2000. 12. 1 発行

編集兼発行　三重短期大学附属図書館　〒514-0112 三重県津市一身田中野157　TEL 059－232－2341


目　次


超常現象・オカルト・疑似科学―簡単に信じこまないためのブックガイド……南　有　哲 (1)

私が20歳だった頃……冬　木　春　子 (4)

新規受入図書案内（2000年４月～2000年９月受入分）…… (7)


## 超常現象・オカルト・疑似科学
### ―簡単に信じこまないためのブックガイド

南　有　哲

**はじめに**

西暦2000年もいよいよ終わりに近づいてきました。新しい世紀を目前にして、これからの科学技術や社会そして人間のあり方が、盛んに論じられています。地球環境破壊・南北格差・民族紛争・人口問題・核の脅威・情報化・生命操作 etc…20世紀の人類が抱え込んだ深刻な問題に、21世紀がそう簡単に答えを与えてくれるはずもないわけですが、そうはいっても新しい時代の到来に、私たちは何ほどかの期待をかけているのでしょう。

それなりに前向きな今年の空気とは対照的に昨年＝1999年の世相の暗かったこと、まさに「世紀末」なる言葉がぴったりだったように思います。いやますばかりの閉塞感や、数年来打ち続く不可解で陰惨な事件の数々もさることながら、私たちの脳裏に刻み込まれた「ノストラダムスの大予言」が、陰鬱な雰囲気を醸し出すのに一役買っていたのは間違いないところでしょう。「1999年７の月」の到来とともに自暴自棄になって自殺や犯罪・散財に走る人が続出する、といった事態が起こらなかったところをみると、あれを正面から真に受けていた人は、さすがに多くはなかったのかも知れません（マスコミ等が必死に鎮静化を図ったからだという説もありますが）。しかし1999年を何となくイヤな気分で迎え、大災厄が起こることも無く過ぎ去ったことで密かにホッとした人が、実は多かったのではないでしょうか。まだ新世紀を迎えたわけでもないのに、2000年の到来をあれだけ大騒ぎして祝った背景には、一つにはこの問題があると私は睨んでいます。

「ノストラダムスの大予言」が日本に広く知れ渡る契機となったのが、1973年の五島勉『ノストラダムスの大予言』（光文社）の刊行ですが、それ以来ノストラダムスや関連したオカルト・超能力・超常現象などを肯定的に扱った書物・雑誌・コミックス、テレビ番組に映画にビデオソフトまでが、文字どおり無数に現われました。これによって日本社会の、特に青少年層の間にオカルティックで終末論的な世界観が普及し、結果としてオウムその他のカルト集団が隆盛する土壌が創り出されたのです（この間のオウム裁判においても、ある幹部がオウムに引かれていったきっかけに、麻原彰晃がオカルト雑誌に寄せた記事があることも明らかにされています）。予言が外れたことが明らかになった今、ノストラダムスでしこたま儲けた著者連中や出版元・マスコミ、推薦文を書いたりしてブームを煽り立てた知識人たちの責任を問う声が湧き起こってきても不思議ではありませんが、これまでのところ著者たちが社会的糾弾にさらされるとか、誰某センセイが自己批判したとか、出版社やテレビ局に対する抗議行動が組織されるとか、有名オカルト雑誌が廃刊に追い込ま

れるとかといった事態は、少なくとも私の見聞の及ぶ範囲では起こっていないようです。そして書店の店頭には、「聖徳太子の大予言」などといった類の書籍が、相も変わらず並んでいるわけです。

結局のところ、読者であり視聴者である私たちが自分を守り、またこういった手合いに踊らされないようにするためには、自らよく学び、批判的・懐疑的な精神をもってこういった情報に接し、簡単には信じ込まないように用心する、ということなのでしょう。これからお目にかけようとするものは、そのためのささやかなブックガイドの試みです。

①オカルト・超常現象全般をとりあげたもの

まず冒頭にあげるべきは、と学会編『**トンデモ本の世界**』（宝島社文庫）でしょう。巷にあふれるオカルト・超常現象・疑似科学関係の本を批判的に（というかツッコミを入れながら）紹介するという形をとっています。この本は発売されるやベストセラーとなってある種の反オカルト・ブームを創り出し、怪しげなオカルト肯定本を意味する彼らの造語「トンデモ本」は、いまや定着した感すらあります。本書の続編『**トンデモ本の逆襲**』（宝島社文庫）は、オカルト開運グッズ（よく雑誌などに通販広告が出ているアレ）や「相対性理論の間違いを発見した」といった類の議論を手際よく紹介しており、参考になります。「本」ではなくて超常現象そのものを批判的にとりあげたのが『**トンデモ超常現象99の真相**』（宝島社文庫）。“99の”と銘打つだけあってＵＦＯから心霊現象、奇跡、超能力、超古代文明にいたるまで幅広く、しかも具体的なテーマをとりあげており、コンパクトなわりには百科全書的な網羅性を誇る好著で、心霊写真を取り上げた項などは秀逸です。安斎育郎『**人はなぜ騙されるのか**』（朝日新聞社）は、このテーマに関わるエッセイ風の文章を集めたものです。著者はまた奇術の達人でもあり、講義で「超能力」「超常現象」を実演することで知られる立命館大学の名物教授。『**超能力ふしぎ大研究**』（旬報社）はさらに平易な文章で読みやすいものになっています。レイチェル・ストーム『**ニューエイジの歴史と現在**』（角川選書）は、近代以降の欧米におけるオカルティズム（ニューエイジ運動）を概括した類例の少ない好著です。ただ著者の姿勢はオカルトに対して必ずしも批判的ではなく、訳者（高橋巌・小杉英了）に至っては公然たるオカルト信奉者だといった点は考慮されるべきでしょう。

②「大予言」関係

あれほど大騒ぎされたにもかかわらず、今や話題に上ることも無いノストラダムス。「もう外れちゃったから関係ないもんね」とみんな思っているのかも知れませんが、オカルトネタというものが大勢の人を、いかに長い間踊らせてきたのかということを知るには、最適の素材であると言えましょう。この問題についての絶好の入門書といえる山本弘『**トンデモ　ノストラダムス本の世界**』（宝島社文庫）は、一読すればこの問題についての概観が得られるスグレモノです。ノストラダムス・ブームに火をつけた五島勉とその著書についても、詳しく紹介されています。同じ著者が2000年に入ってから出版した『**トンデモ大予言の後始末**』（洋泉社）も一読の価値アリ。同様のコンセプトで書かれた山田高明『**トンデモ予言者大集合**』（ＫＫベストセラーズ）は新興宗教系の著者のものを系統的にとりあげています。「大予言」ブームの背景をなす千年王国思想や終末論については、ダミアン・トンプソン『**終末思想に夢中な人たち**』（翔泳社）がお勧め。キリスト教における終末論の伝統からわかりやすく説明してくれており、日本のオウム事件も現代における好例として取り上げられています。

③心霊現象・超能力

このテーマについては、講談社ブルーバックスからいくつか紹介しておきましょう。高橋紳吾『**きつねつきの科学**』は、憑依という極めてインパクトの強い現象を扱ったもので、シャーマニズムや多重人格といった問題にも触れながら論じています。中村希明『**怪談の科学**』は、幻覚や幻聴・幻視が起こるメカニズムについて説明しながら、幽霊とは「いる」ものではなく「現れる」ものだと説いていま

す。同じ著者の手になる『**怪談の科学PART 2**』は『今昔物語』など過去の文献に見える怪談や奇談の類に精神医学的な解釈を施したもので、読み物としても楽しめるものになっています。いまやタレント教授としても有名な大槻義彦氏の手になるのが『**超能力ははたしてあるか**』。スプーン曲げや気功、念写といった超能力のカラクリを、豊富な図解と写真を交えながら解き明かしてくれます。ただ、大槻氏の議論の仕方や（テレビなどでの）言動については、反オカルトの人々の間からもいろいろと批判が出ているということは付け加えておきましょう。

④疑似科学をめぐって

オカルトや超常現象に無批判な議論のなかには、科学を否定し伝統的な宗教や呪術に依拠しようとするものとは別に、科学の用語や権威を積極的にとりこむことで、結果として科学的な考え方や科学の成果を否定したり、ねじまげようとするものが数多く存在します。これが疑似科学と呼ばれるものですが、両者の違いは、たとえば通販されているオカルト開運グッズのなかの、「インドの高僧が７日７夜の間不眠不休で祈りを込めた米粒」と「○×大学の★☆博士によって、脳を刺激する特殊な放射線が出ていることが検出された宝石」との違いであり、またある民族を差別する理由が「神に背いた汚らわしい異教徒」だからなのか、それとも「生まれつき能力が低く利己的で、人類を遺伝的に堕落させる劣等人種」とだからなのかの違いでもあります。科学とテクノロジーが広く普及するなかで、オカルトも〝科学的〟な言葉で自らを武装し、説得力を確保する必要が出てきたからでしょう。

この分野での古典的な名著とされるのが、マーティン・ガードナー『**奇妙な論理Ⅰ**』および『Ⅱ』で、社会思想社の現代教養文庫に収録されています。原著が出版されたのが1952ですが、この種の問題に関しては、半世紀の時をへても状況はほとんど変わっていないのだということに、むしろ驚かされます。同様の内容をより現代に即して展開したものがテレンス・ハインズ『**ハインズ先生「超科学」をきる**』および『ＰａｒｔⅡ』（化学同人）。訳題は今一つですが、ダイエットの問題などもとりあげられ、大変面白いものです。ただ精神分析やある種の心理学に対する批判については学問的な論議の余地があることでしょう。先年亡くなった著名な宇宙科学者の遺作となった『**カール・セーガン　科学と悪霊を語る**』（新潮社）は、430頁を超える分厚いものですが、内容は割に理解しやすい好著です。特に第12章「トンデモ話を見破る技術」は必読であると思われます。他にはマイケル・フリードランダー『**きわどい科学**』（白揚社）などがあります。

⑤オカルトを信じこむ心

最後に、オカルトや超常現象といったものを人はなぜ案外簡単に信じてしまうのかという、「信じる心」を扱った本を紹介しましょう。菊池聡『**超常現象をなぜ信じるのか**』（講談社ブルーバックス）は、私たちが日常生活において判断の基準にしている「体験」が、いかに危ういものであるかということを、心理学の立場から説明しています。この本のユニークなところは、超常現象を信じてしまうのは、その人が「バカだから」ではなく、人間が生まれつき備えている認知と思考のシステムが、そのような誤った認識へ導いてしまうのだ、という点を詳しく論じているところです。トーマス・ギロヴィッチ『**人間　この信じやすきもの**』（新曜社）は、誤ったことを信じ込む誤信や迷信が発生する背景を、心理的要因と社会的要因から説明しています。「噂を信じる――人づての情報のもつゆがみ」、「みんなも賛成してくれている？――過大視されやすい社会的承認」といった章はなかなか参考になります。

# 私が20歳だった頃

冬木　春子

「20歳」という年齢は「大人」として社会的に認知される節目の年であるが、この頃は勉強や将来のこと、恋愛のことなど多くの悩みに遭遇し苦しむ時期でもあろう。その反面、柔軟な心や知能を持ち合わせ、少々の困難を乗り越えていく力を備えているのもこの頃である。私も20歳の頃、多くの悩みや困難に遭遇し、それを必死に乗り越えようとする中で今の「私」という人間の基礎をつくりあげた気がする。そこで、まことに個人的な事柄であり恐縮であるが、私が20歳だった頃に思いを馳せ、その時の体験について述べてみようと思う。

私が20歳だった頃、将来幼稚園教員になるために、毎日ピアノや絵画制作をはじめ保育内容の研究などに忙しい学生生活を送っていた。将来は「幼稚園の先生になるんだなあ」と漠然とした目標をもっているにすぎず、「結婚や出産をしたら仕事もやめて専業主婦になろうか」ぐらいの生活設計しかしていなかった。当時一般的であった「3高の彼氏」を見つけて結婚することが女の幸福であると何の疑問ももたずに信じていたのである。それはある意味では無理もないことである。当時、第二次ベビーブームの影響もあり、大学合格は狭き門であり、「将来何をして、どう生きたいか」などと高校時代にじっくり考える余裕すらなく、偏差値によって進路が自ずと決まると言っても過言ではなかったからである。しかし、そのような漠然とした生活設計の中で、私は不幸にも自分が不器用であり、それが幼稚園教員になることへの妨害要因であることに気づき始めたこともあり、しだいに自分の将来について不安を感じ始めたのも事実である。そして自分自身に「私は将来本当に何をしたいか」「私はどんな人生を望んでいるのだろうか」と問うた時、何か空虚なものを感じ、どうすればいいのかわからないまま時が過ぎてしまうのだった。

そんなある日、私の通っていた大学とアメリカのペンシルバニア州の大学が交換留学制度を設けていることを知り、私の胸は高鳴った。「ひょっとしてアメリカへ行けば自分が本当にやりたい何かが見つけられるかもしれない」そんな思いに駆られたのである。今思い返せば、何とも漠然とした留学への思いであるが、おそらくそれは親の保護から離れて「自分らしく」生きたいとする自立願望の現れであったような気がする。また、当時感じていた空虚感を打ち消すためにも、より過酷な状態に自分を追い込むことによって、自分の可能性を試してみたいとする願望の現れだろうとも思う。とにかくその後、「ぜひとも留学をしたい」という思いがつのり、私は今までになく英語の猛勉強にとりかかった。そして、TOEFL受験や選考試験などを掻い潜り、1年後には他の3人と共にアメリカのペンシルバニア州立ロックヘイブン大学へ向けて飛び立ったのである。

ロックヘイブン大学は、アパラチア山脈が背後にそびえ、広大なサスケハナ川が流れる美しい町に立つ。大学まではニューヨークから車で約6時間程度で、交通手段は車か一日一便のバスだけという、私が経験したこともない辺鄙な場所であった。この大学は州立の教員養成系の単科大学であり、小規模の大学である。昨今は国際交流プログラムを積極的に行っているために、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、中南米など世界各国からの留学生を多く受け入れていることでその地方では有名な大学でもある。

アメリカでの大学生活において、最初の壁は語学であった。当初はアメリカ人のスラング混じりの英語に慣れないばかりか、留学生が強いなまりがある英語で早口で自己主張すると、あっけにとられてしまい、自分の言いたいことも言えず、うなずくだけで終わることがしばしばであった。特に夕食時は寮のキャフェテリアでテーブルを囲んで留学生同士で食事をすることが多く、話の流れについていけずに一人で苦笑したり、輪の中にいるものの孤独を感じたりすることが多かった。英語についていけないことから友だちも増えず、自分の言いたいことも言えないためにストレスが溜まり気分も沈んだ。そんな時、ドイツ人の女子学生に「あなたはいったい何年間英

語を勉強したの」と聞かれ、私が8年間ほど文法中心に学習したことを伝えると「それじゃ、あなたはアメリカ人よりもさぞかし文法をよく知っているんでしょうよ」と皮肉を言われて、さらに私をがっかりさせたこともあった。しかし、今思えば留学生たちは必ずしも上手で完璧な英語を話しているわけではない。それぞれが特有のくせをもち、時には文法上誤りがある英語を話しているのであるが、彼らに備わっていたのは、どんな異なる背景をもつ人との間にも円滑にコミュニケーションができる能力であり、自己の意見をどんな人にも主張する確固とした意思であった。それが当初の私に欠けていたのである。このような当初の体験を振り返る時、21世紀を担う日本の若い方々に必要なのはネイティブなみの英語を話せることではなく、異なる背景をもつ人との間で行える豊かなコミュニケーション能力であると思う。しかし、わが国における国際化時代への対応として、日本人の英語力を高めることばかりに注意が向けられているような気がしてならない。

その後、ドイツ人の女子学生の一言に刺激され、「こうなったら、何が何でも英語を上手にしゃべってやる」と決意し、とにかく話し相手のアメリカ人を見つけようとした。しかしよく見渡せば、アメリカ人で英語が苦手な外国人の相手をする程暇な人を見つけるのは非常に難しい。アメリカの大学生は、自分で大学の学費を払っている人もかなりおり、アルバイトで忙しい。また私のルームメイトのように、ボーイフレンドに夢中で昼夜彼と過ごしているため、寮にはほとんど戻ってこない学生もいる。さらに土地柄もあるだろうが、他国の文化に興味をもったり、一緒に勉強をしている留学生に関心を示すようなアメリカ人はそれほど多くはない。一方で彼らは慣れてくると、年齢や性に関わりなく非常にフレンドリーな側面を見せてくれる。またアメリカ人でも、競争的で攻撃的なアメリカ人に合いそうにない、もの静かで動作がおっとりとしたアメリカ人もいる。そういうアメリカ人は日本人といる方が本人にとっても気がやすまるらしく、いつのまにか彼らは私の良き話し相手になってくれた。例えば私の一番の友人であるアンジーは、田舎の貧しい家庭の出身で、非常に静かで人見知りをするが、授業で何度か会い話すうちに意気投合して、休暇には彼女と一緒に実家へ帰るようになった。また、ケビンは動作が遅くいつもカフェテリアで最後まで独りで残って食事をしているが、私とカフェテリアで何度か会ううちに、よき話し相手になってくれたものだ。このように、少しずつ仲が良いアメリカ人も増えていき、そのうち私の英語も上達をしていくようになった。

次は大学の講義についてである。アメリカの大学（学部レベル）では、授業は週3日毎時50分、あるいは週2日毎時75分行われる。私はアメリカで取得した単位を日本の大学で単位認定してもらう必要があったために、必死の覚悟で望んだ。授業の予習として、あらかじめ教科書の講義予定の部分を何度か読むのである。しかし、それでも授業はついていけなかったため、途中からテープレコーダーをもちこんで講義を録音し、それを何度も再生しノートをつくった。再生してもわからない箇所は、テープレコーダーをもって寮中を歩き回り、どんな人にでも聞いた。それだけ熱心に取り組んでも、数度とあるテストには苦労した。例えば「心理学」の授業では、テストは月一回ほど行われるのであるが、問題の量が多く問題をゆっくりと読んでいると時間切れになってしまう。初めてのテストでは時間切れで終わり、せっかくの努力も水の泡になり、すっかり元気をなくし廊下で立ちつくしている私に、担当教員のボッシュ先生が「どうしたのか」と声をかけてくれた。私が理由を述べると、彼は「君が精一杯取り組んでいることは私も知っている。時間が足りないのなら、今から好きなだけテストの続きをしなさい。」と私にだけ特別にテストの時間延長を認めてくれたのである。私はその時の彼の配慮を今でも忘れることがない。彼は必死に勉強してもついていけないアジア人の留学生に手を差し伸べてくれたのだ。私はこの体験から、やる気を出して一生懸命取り組めば、それに応え応援してくれる人がいると言うことを感じ、これは私のやる気を引き出してくれることになったのである。

アメリカの大学に来て半年後、私は「もっとアメリカを感じたい」との思いから、大学のキャフェテリアでアルバイトを始めた。初めは週に2回程度夕食の片づけとして、食器回収や大きな皿洗い機に皿やコップ、フォークやナイフを入れたり、取り出したりするのが主な仕事だった。そこにはアメリカ人をはじめ留学生が多く働いており、仕事の仕方もそれぞれだった。ロックミュージックをかけて踊りながら仕事をする人、仕事をしながらずっと話続けている人、休憩ばかりとる人などである。その中で私は黙々と自分に割り当てられた仕事を真面目にこなした。そうすると中には、「なあ、少しは話でもしようよ」と話かける人もいたが、お金をもらっている以上手を休めることなく、とにかくどんな仕事でも引き受けて働いた。それが日本にいる時に学んだ「働き方」でもあったからである。ところがそのような私の真面目な仕事ぶりはマネージャーの目に留まったらしく、しだいに割り当てられる仕事時間が増えていき、私は日常生活費や旅行費用の捻出のためにさらに熱心に働くことになった。ただそうなると、それは周りの留学生の仕事が減らされることを意味しており、ロシア人の留学生からは「なんで日本人なのにこんなところで働いているのさ。俺達の仕事とらないでくれよな」と皮肉を言われたこともあった。このように、自分の真面目な仕事ぶりが目に見えるかたちで評価されたことは、私の自己効力感を高めたのは言うまでもない。日本では勉強がそれほどできるわけでもなく、かと言って運動も得意でない私が、アメリカでいろいろな人から支援を受け、かつ良い評価を受けたことは「自分もやればできる」とする大きな自信につながったのである。

このように、10ヶ月間は思いのほか速く過ぎてしまい、私は帰国した。帰国後、今度はリバースカルチャーショックで苦しみ、悩むことになるのであるが、何よりもこの留学を通じて多くのものを得た。それは多くの体験を通じて、どんな環境においても耐えられる自分の強さや可能性に気づいたことである。一方で、異国で孤独に「自分」と向き合うことができ、それまで隠れていた自己の認識が深まったこともある。そして何よりもアメリカにおいて、主体的に積極的に取り組む姿勢を学んだことは、それからの私の生き方の土台となったのである。そして漠然とした生活設計しかもたなかった私が、自分なりにも「本当にしたいこと」に気づき始め、大学院へ進学してみたいと考えるようになったのである。

今、20歳の人たちはどのような悩みや不安を抱えているだろうか。私が20歳だった頃に感じたような将来のこと、あるいは自分の生き方に対して漠然とした不安を感じている人は少なからずいることだろう。私はそのような不安を乗り越えるのに「留学」という手段を選んだが、それぞれの状況に応じて他にも種々様々な手段があってもよいはずである。とにかく一度何ができるのか自分自身に問い、自分に与えられたチャンスを最大限に活かし、悩みや不安を乗り越えていってほしいと思う。この私の個人的な体験談が、若い方々の参考に少しでもして頂ければ幸いである。

# 新規受入図書案内
（2000．4～2000．9）

## 総　記（000）

〈岩波新書〉

| | |
|---|---|
| 歌舞伎の歴史 | 今尾　哲也 |
| 中国文章家列伝 | 井波　律子 |
| 景気と国際金融 | 小野　善康 |
| 科学事件 | 柴田　鉄治 |
| 熊野古道 | 小山　靖憲 |
| 西遊記 | 中野　美代子 |
| インターネット術語集 | 矢野　直明 |
| 私とは何か | 上田　閑照 |
| 日本文化の歴史 | 尾藤　正英 |
| NATO | 谷口　長世 |
| 経済刑法 | 芝原　邦爾 |
| アメリカの家族 | 岡田　光世 |
| 木造建築を見直す | 坂本　功 |
| 金融工学とは何か | 刈屋　武昭 |

〈岩波ブックレット〉

| | |
|---|---|
| マンション・トラブル | 山上　知裕 |
| いやな時代こそ想像力を | 佐高　信 |
| 国際選挙監視とNGO | 首藤　信彦 |
| 「自由主義史観」批判 | 永原　慶二 |
| 警察は変わるか | 小林　道雄 |
| 石橋湛山と小国主義 | 井出　孫六 |
| リストラ・転職・起業 | 高任　和夫 |
| デジタル産業革命 | 山根　一眞 |
| 英和コンピューター用語辞典 | 研究社辞書編集部 |
| アップル　上・下 | ジム・カールトン |
| プランと状況的行為 | ルーシー・A・サッチマン |
| 橋をかける | 美智子 |
| 伊東家の食卓裏ワザ大全集 | 日本テレビ |

## 哲　学（100）

| | |
|---|---|
| 超常現象の心理学 | 菊池　聡 |
| 爆笑北欧神話 | シブサワ・コウ |
| 父親の発達心理学 | 柏木　恵子 |

## 歴　史（200）

| | |
|---|---|
| TIMEが選ぶ20世紀の100人 上・下 | 徳岡　孝夫 |
| 大阪新発見散歩 | 昭文社 |
| 全国公共の宿 | 昭文社 |
| タイの本 | 昭文社 |
| カナダの本 | 昭文社 |
| イギリスの本 | 昭文社 |
| オーストラリアの本 | 昭文社 |
| ニューヨークの本 | 昭文社 |
| 関西周辺美術館めぐり | 昭文社 |
| 関東周辺美術館めぐり | 昭文社 |
| 「超」旅行法 | 野口　悠紀雄 |
| ユダヤ人の歴史　上・下 | ポール・ジョンソン |
| ダンディズム | 生田　耕作 |
| 河芸町史 史料編　上・下 | 河芸町史編さん委員会 |
| だから、あなたも生きぬいて | 大平　光代 |

## 社会科学（300）

| | |
|---|---|
| 学校再生 | 軍司　貞則 |
| 公用負担・建築基準関係訴訟法 | 中野　哲弘 |
| 最高裁判所判例解説　刑事篇 | 法曹会 |
| 詳解アメリカ移民法 | 川原　謙一 |
| 市場経済化する中国 | 加々美　光行 |
| 日本国憲法の心とはなにか | 川村　俊夫 |
| 立憲主義 | 阪本　昌成 |
| 新検定簿記ワークブック | 岡本　清 |
| 日本経済の変容 | 伊東　光晴 |
| 社会的規制の経済分析 | 八代　尚宏 |
| これで読めるエコノミストの英語 | 早野　勝巳 |
| 戦略管理会計 | 西山　茂 |
| 戦略財務会計 | 西山　茂 |
| やさしくわかる時価会計 | 神保　正人 |
| 中国経済は成功するか | 渡辺　利夫 |
| ドル支配は続くか | 中尾　茂夫 |
| 「教室」をひらく | 中内　敏夫 |
| 近代日本騒擾裁判史の研究 | 上野　利三 |
| 数字で見る高齢社会 | 総務庁長官官房高齢社会対策室 |
| 実践的消費者読本 | 林　郁 |
| 保険と年金の動向 | 厚生統計協会 |
| 家計消費の動向 | 経済企画庁調査局 |
| 史料道徳教育の研究 | 岩本　俊郎 |

特集公社・第三セクターの改革課題　成瀬　龍夫
老人福祉のてびき　長寿社会開発センター
21世紀地球社会と教師教育ビジョン　加藤　章
盲ろう者とノーマライゼーション　福島　智
障害者福祉学　秦　安雄
新編家庭科教育法　家庭科教育法研究会
日本古代法制史　利光　三津夫
図解家庭科の実験・観察・実習指導集　日下部　信幸
分析・日本資本主義　清野　良栄
個別援助の方法論　岡村　正幸
問われる子どもの人権　日本弁護士連合会
憲法　樋口　陽一
現代日本の法　小沢　隆一
図でわかる学習と発達の心理学　新井　邦二郎
発達と学習の心理学　多鹿　秀継
教育実習　秋山　和夫
教職課程の介護等体験実習の基礎　小池　妙子
社会調査へのアプローチ　大谷　信介
ユーロは世界を変える　相沢　幸悦
ヘッジファンド　浜田　和幸
高齢社会の下での若年と中高年のベストミックス　労働省
担保物権法　我妻　栄
物権法　上・下　我妻　栄
私法の道しるべ　我妻　栄
日本型金融制度改革　吉野　直行
国際金融の現代　深町　郁弥
障害児心理学　松野　豊
コンメンタール国際会計基準1・2・3・4・5　間島　進吾
資金調整と経理統制　山住　克己
戦時経済と物資調整　椎名　悦三郎
図解バリア・フリー百科　日比野　正己
会計学　染谷　恭次郎
商業簿記　新井　清光
原価計算　岡本　清
工業簿記　岡本　清
図説わが国の銀行　全国銀行協会金融調査部
ユーロ経済を読む　新田　俊三
シティバンクとメリルリンチ　財部　誠一
福祉・住環境用語集　中井　多喜雄
産業国策と中小産業　豊田　雅孝
戦時経済と物価統制　石黒　武重
戦時経済と貿易国策　菱沼　勇
戦時経済と海軍国策　尾関　将玄
戦時経済と交通運輸　長崎　惣之助
戦時経済と燃料国策　東　栄二
戦時経済と電力国策　田村　謙治郎
戦時経済と労務統制　内藤　寛一
台所の100年　日本生活学会
生活学（全19冊）　日本生活学会
構造変化の経済動学　Pasinetti, Luigi
労働災害補償法論　本多　淳亮
現代法律百科大辞典（1～8）　園部　逸夫
Nippon　日本貿易振興会
精神薄弱児の教育とコンピューター　放送教育開発センター
聴覚を生かす　放送教育開発センター
点字で学ぶ　放送教育開発センター
対話への道徳教育　徳永　正直
図説高齢者白書　三浦　文夫
子どもの権利実現と市民的共同　日本子どもを守る会
図説日本の税制　池田　篤彦
エコノミーの衝撃　中谷　巌
経済思想史辞典　経済学史学会
進む「教育改革」　文部省
図説地方財政　嶋津　昭
財政の現状と展望　財政政策研究会

## 自然科学　（400）

中性脂肪を減らす食事　近藤　和雄
血糖値を下げる組み合わせ自由簡単メニュー　井上　修二
透析を避けるための毎日のおいしい腎不全献立　鈴木　吉彦
施設別集団給食献立集　殿塚　婦美子
栄養所要量・基準量と食生活ガイドライン　小林　修平
病態と栄養　岡田　正
知っていますか子どもたちの食卓　足立　己幸
一生使える毎日の糖尿病献立　塩沢　和子
集団給食献立作成　山本　恭子
これでいいのか日本の食事　木下　冨雄
栄養・運動・休養　糸川　嘉則
まるごと学ぶ食生活と健康づくり　加藤　秀夫
足の事典　山崎　信寿

遺伝子組み換え食品の争点　緑風出版編集部
演習形式で学ぶやさしい無機化学　前野　昌弘
生化学　香川　靖雄
機器分析の基礎　江藤　守総
生化学実験法　八木　達彦
生物学と人間　赤坂　甲治
食生活情報ブック　ラ・ラの会
保健栄養学　片山　洋子
ケーススタディ運動療法　坂本　静男
何を食べたらよいのか　日本農芸化学会
骨が語る　鈴木　隆雄
心とからだの健康設計　大島　清
今、何故ウォーキングなのか　鈴木　尭士
データでみる百歳の科学　鈴木　信
課題学習に役立つ新しい健康問題のとらえ方　篠原　菊紀
21世紀の食を探る　村上　清尚
苦悩する科学　田近　伸和

## 工学・技術　（５００）

世界の名茶事典　講談社
食べきりサイズのお菓子　矢崎　美月代
材料別お料理百科　主婦と生活社
はじめてのインターネット　鈴木　有美
かんたん図解インターネット　島　望
調理の基本大図鑑　講談社ペック
ちゃんと作れる和食　刈谷　政則
生活の基本365日　五代　純子
洗濯上手こつのコツ　婦人之友社
衣服材料の科学　島崎　恒蔵
献立学　熊倉　功夫
住まいを読む　鈴木　成文
地域の駅　建築思潮研究所
木造の教育施設　建築思潮研究所
児童館・児童文化活動施設　建築思潮研究所
戸建て集合住宅による街づくり手法　猪狩　達夫
環境問題を学ぶ人のために　和田　武
自動車の危機　岡崎　宏司
人の視点からみた人工物研究　原田　悦子
オール実例小さくてもすてきな家は建てられる　高野　好造
きもの地でつくる簡単服と小もの　服部　淳子
近代建築の黎明　二川　幸夫
近代建築の開花　二川　幸夫
図集・現代和室の意匠　佐藤　守男
高齢者・身障者を考えた建築のディテール　健康環境システム研究会
家づくりの話　丸谷　博男
ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法　進士　五十八
バリアフリー住宅の実際と問題点　菊地　弘明
コモンで街をつくる　宮脇　檀
「都市計画」の誕生　渡辺　俊一
町家型集合住宅　巽　和夫
つくるならこんな家　佐川　旭
日本建築様式史　太田　博太郎
こどもと暮らすインテリア術　奈浦　なほ
家族と健康にやさしい住まい　田中　恒子
建築を語る　安藤　忠雄
服装造形論　小池　千枝
接着芯の本　新家子　敏子
京都町家色と光と風のデザイン　吉岡　幸雄
洋裁の基礎と応用　東京家政学院短期大学
職業用ミシンの操作と調整法　長谷川　廣栄
衣服の幾何学　篠原　昭
衣生活論　中島　利誠
「幸せ」をつかむ家づくり　井上　賢二
高齢者が住みたい家　山根　千鶴子
台所空間学　山口　昌伴
スケッチで見るキッチンデザイン　塚本　貞省
動物と暮らす住まい　川崎　衿子
本を愛する住まい　松澤　貴美子
衣生活を整える住まい　川崎　衿子
家族で造る住まい　中森　紫光
大工棟梁の知恵袋　森谷　春夫
小さな部屋の素敵インテリア　成美堂出版編集部
旅泊の空間　宮本　和義
老人ホーム　岡　秀世
大量調理　山本　恭子
環境用語辞典　上田　豊甫
建築大辞典　彰国社
ライティングデザイン　竹内　義雄
インテリアデザインへの招待　沢田　知子
共に住むかたち　小谷部　育子
インテリアの発想　北浦　かほる
インテリアと日本人　内田　繁
インテリアリラクゼーション　なかむら　ふみ
理想のインテリアと雑貨　吉沢　深雪

「いい住まい」の本　天野　彰
インテリア・プランニング・ドキュメント
　インテリア・プランニング・ドキュメント編集
私の家づくり　髙野　好造
アトピー・ぜんそくの出ない住まい　末廣　豊
公庫のデータから見えてくる日本の住まい方
　豊な住生活を考える会
体育館　日本建築学会
家のかまえ　日本建築学会
独立住宅　日本建築学会
幼稚園・小学校　日本建築学会
児童施設　日本建築学会
スポーツ・イベント・展示ホール　日本建築学会
建築学便覧　日本建築学会
新・事務所ビル　谷口　汎邦
集合住宅地　谷口　汎邦
建築外部空間　谷口　汎邦
都市再開発　谷口　汎邦
スポーツ施設　谷口　汎邦
保養所　谷口　汎邦
ホテル・旅館　谷口　汎邦
商業施設　谷口　汎邦
超高層事務所ビル　谷口　汎邦
事務所ビル　谷口　汎邦
研修施設　谷口　汎邦
街なみ・街づくり　谷口　汎邦
博物館　谷口　汎邦
美術館　谷口　汎邦
研究施設　谷口　汎邦
医療施設　谷口　汎邦
高齢者施設　谷口　汎邦
公共ホール　谷口　汎邦
公民館・コミュニティセンター　谷口　汎邦
庁舎施設　谷口　汎邦
中層集合住宅　谷口　汎邦
高層・超高層集合住宅　谷口　汎邦
住宅　谷口　汎邦
構造・環境設備・法規　谷口　汎邦
計画・製図・単位空間　谷口　汎邦
人間住宅　建築・都市ワークショップ
モダンリビング　アシェット婦人画報社
誰にも聞けない家造りのコトバ　遠藤　与志郎
安藤忠雄　1・2・3　安藤　忠雄
高松伸　高松　伸
磯崎新　1・2・3・4　磯崎　新
丹下健三　1・2・3　丹下　健三
槙文彦　1・2・3　槙　文彦
黒川紀章　黒川　紀章
象設計集団　象設計集団
堀口捨己　堀口　捨己
家は子どものためにつくるもの
　ミサワホーム広報室
齋藤裕　齋藤　裕
石井和紘　石井　和紘
林雅子　林　雅子
金寿根　金　寿根
白井晟一　白井　晟一
岡田新一　岡田　新一
早川邦彦　早川　邦彦
原広司　原　広司
長谷川逸子　長谷川　逸子

## 産　業　（600）

エビ・カニ魚類　平凡社
貝類魚類　平凡社
イカ・タコ類ほか魚類　平凡社
ほぼ倍増した対日投資　日本貿易振興会
農産物の輸入と市場の変貌
　食料・農業政策研究センター
ウォルト・ディズニー・ワールド　完全ガイド
　講談社
東京ディズニーランドテーマランド別ガイド
　オフィスマスト
ウルグアイ・ラウンド　溝口　道郎
食料・農業・農村白書付属統計表　農林統計協会
交通安全白書　総務庁
世界の公共広告　金子　秀之
地方からの農政改革　石田　正昭
観光白書　総理府

## 芸　術　（700）

やさしい絵手紙　小池　邦夫
楽しいイラスト　MPC編集部
年中行事カット集　小林　正樹
唐三彩と奈良三彩　矢部　良明
宋・元の青磁・白磁と古瀬戸　今井　敦

らくらくウォーキング健康法　佐田　正樹
あるく　宮下　充正
新・日本人の体力標準値
東京都立大学体力標準値研究室
炎の画家三岸節子　吉武　輝子
名曲は名医　石黒　捷一
ロックの世紀　Bergamini, Andrea
ジャズの歴史　Vigna, Giuseppe
ショパンとロマン派の音楽　Gavalletti, Carlo
ベートーベン　Bergamini, Andrea
オペラのすべて　Taverna, Alessandro
クラシック音楽の新しい聴き方　Waugh, Alexander
インテリアカラーブック　Beazley, Mitchell

## 語　学　（800）

こまったときの文書の書き方　松山　彰
ニュース英語のボキャブラリ　真鍋　輝明
The parallel universe of English　佐藤　良明
上級をめざす英語リーディングの技術　高橋　潔
リーディング上達法　政次　満幸
The universe of English
東京大学教養学部英語教室
The Expanding Universe of English
東京大学教養学部英語教室
人前であがらず話す法　鈴木　康之
人生を変える話し方77の法則　江川　ひろし
すぐに役立つ手紙の書き方　林　俊一
すぐに使えるはがきの文集例　水野　紫
基本からわかる英語リーディング教本　薬袋　善郎

## 文　学　（900）

淳　土師　守
アニマル・ロジック　山田　詠美
みんなの秘密　林　真理子
日本の小説全情報　日外アソシエーツ
ひとたびはポプラに臥す　1～6　宮本　輝
冷静と情熱のあいだ　江国　香織
ブエノスアイレス午前零時　藤沢　周
ひとりの女　群　よう子
モナリザの微笑　斎藤　純
銀の館　上・下　永井　路子
平家物語の女性たち　永井　路子
サン＝テグジュペリの生涯　Schiff, Stacy
「少年A」この子を生んで　「少年A」の父母
何ものも恐れるな　上・中・下　天馬　龍行
ジェニーのなかの400人　Spencer, Judith
火の山　上・下　津島　佑子
ハードボイルド／ハードラック　吉本　ばなな
旅涯ての地　坂東　眞砂子
女たちのジハード　篠田　節子
呪縛　上・中・下　高杉　良
ゴールドラッシュ　柳　美里
白蓮れんれん　林　真理子
ドラマチックチルドレン　乃南　アサ
心室細動　結城　五郎
岸和田少年愚連隊　中場　利一
総督と呼ばれた男　佐々木　譲
バスティーユの陰謀　藤本　ひとみ
ひまわりの祝祭　藤原　伊織
第一級殺人事件　中嶋　博行
マーシャとダーシャ　Masha
ターゲット　楡　周平
ガリバー・パニック　楡　周平
春雷　伊集院　静
火怨　上・下　高橋　克彦
「吾輩は猫である」殺人事件　奥泉　光
サイレント・ナイト　高野　裕美子
吉沢久子の簡素のすすめ　吉沢　久子
碧玉の女帝　推古天皇　三田　誠広
ストレンジ・デイズ　村上　龍